

Japan : The most insular Country



た い い ち ろ う
田井 一郎

(株)東芝 常任顧問／元電気学会会長

(一社)電気学会は、今年設立125周年を迎えます。東日本大震災で被災された地域・方々の御苦勞を想い、また大きな課題をかかえる島国日本が世界のリーダー国として復活前進・成長するには、どうしたらいいのか？と考えるをえません。明治維新後の大変化の日本の中で、先人たちは電気学会を作り夢の実現へ向けて大変な苦勞をされましたが、その足跡の一部を辿り、私たちが改めて考えなければいけないことは何か考えてみました。

工部大学校電気工学科の初代教授志田林三郎氏(佐賀出身)が電気科学と電気事業の発展のため、明治21(1888)年5月、時の通信大臣榎本武揚を初代会長とし、自らは幹事となって電気学会の設立を宣言しました。同年6月第一回通常会において、志田教授は、テレビジョン技術など9つの将来技術を予言するなど、伝説として語り継がれる名演説を行いました。若き日、英国グラスゴー大学ケルビン卿の下で物理・電気を広く学び、クリーランド金賞メダルを受賞した志田氏の面目躍如の演説だったようです。

電気学会創設にあたり、志田幹事は、当会の将来における振興を図るため社会に名望ある人々を推薦して名誉員とすべしと、明治21年から明治24年まで、榎本武揚、野村靖、石井忠明ら通信省高官9名を立て続けに名誉員としましたが、国会議事堂で起きた火災の原因が電灯であるとされ、その責任を電気学会志田幹事が問われるなどし、通信省から追われ、失意の中、明治25年1月、36歳という若さで亡くなりました。その後37年間、新たな名誉員の任命はなされませんでした。復活したのは、昭和4年からです。外国人発明家トーマス・エジソン、エルマー・スペリー、アーサー・ケネリーなど、昭和8年から、ノーベル賞受賞者グリエルモ・マルコーニ、アービン・ラングミュア、そして長岡半太郎先生など世界に冠たる人々が列せられました。その後は、昭和44年のミーク博士、昭和50年のロェブ教授を最後に昭和51年以降37年間外国籍名誉員は任じられていません。

戦前の電気学会は、列強に伍そう、列強に追い付こうという懸命な努力の中で、日本の政府高官、欧米の実力著名人との直接的また現実的な関係を強く持ち、結果的

に相当にグローバルだったのだらうと思われる。戦後、猛烈な勢いで経済的な成長をとげた日本は、昭和50年代、「もう技術導入は終わった、これからは世界に冠たる日本の発展だ!」と、自分たちが取り組んできた分野の中だけでの心地よい言葉と「自信」の裏で、新しい分野の取り込みや挑戦が弱くなり、従来分野の成長の飽和と慢心が起きているのではないのでしょうか。

英国生まれのマイケル・ファラデー(1791年生)とジェームス・ワット(1736年生)の発見・発明が今日の高度な社会の基礎をもたらしてくれたのですが、その豊かさの獲得に向け、世界70億人超が次々と津波のように進んでいます。1970年の世界の人口は40億人。その中で先進国と言われた7億人が享受していたレベルに向かい、約10倍の人々が資源、権利の獲得にせめぎ合い、多数国が混在して争いあう複雑な状況になりました。電気科学もそのあまりの重要性において、多くの分野に分化し、破竹の勢いで発展している分野もあれば、停滞している分野もあります。

電気学会が取り組んでいる分野ではどうでしょうか? 分野を狭く定義し、守りに徹するような行動をとってはいないのでしょうか? これまでは協調して成長すればよかった欧米的社会の一員という意識から決別できない思考や行動が多いのではないのでしょうか? 世界のだれにも負けたくないならば、10倍にも増えた競争相手に対して、10倍の力で闘わなければなりません。10倍の力を出すには従来の仕組みや取り組み方では不可能です。事業分野、制度、社会の仕組み、場合によっては文化などあらゆる変化の可能性を総動員して挑戦しなければなりません。それにはきしみも伴いますし、痛みもあります。

夢の実現にがむしゃらに努力してきた明治期の先人のように、絶対に変化してやろうと、変化に次ぐ変化を繰り返して実行する日本人に変わろうではありませんか? また変化を受け入れる包容力ある自分になるうではありませんか。米国National Bureau of Economic Researchの調査で、トップ16カ国のScientistsの国際間移動の状況が報告されました。Japan is the most insular country surveyed. こんなコメントは頂かぬようにしたいものです。